

丸山眞男関係未発表資料翻刻

南原繁書簡 丸山眞男宛 二二点

川口雄一（編注）

南原繁書簡の翻刻にあたって

丸山文庫には、段ボール二六箱に及ぶ丸山眞男宛の書簡が所蔵されています。現在、その調査と整理を進めていますが、発信者・受信者等のプライバシーを考慮し、関係者の存命中は原則非公開としています。しかし、調査の過程で、史料的价值が高く、かつプライバシーに触れるおそれのないものが発見された場合、例外的にその内容を翻刻・公開してきました。

今回は、これまでの書簡調査で高い史料的价值が確認されていた南原繁書簡を翻刻することとしました。南原繁（一八八九—一九七四）は、新渡戸稲造が校長を務めていた第一高等学校、東京帝国大学法学部を卒業後、一九一四年内務省に入省。一九二一年に東京帝大助教に転じ、政治学史を担当しました。一九四五年には総長に就任、日本国憲法や戦後教育改革など戦後日本社会の建設に積極的に関わりました。また南原は丸山眞男の師であり、のちに丸山が担当する東洋政治思想史講座の設置（一九三九年）にも携わるなど、丸山と非常に深い

つながりのあることは周知のとおりです。

本年度は、新渡戸が初代学長を務めた本学の創立一〇〇周年、また丸山文庫の開設二〇年の節目にあたることも、二〇一九年は南原の生誕一三〇年にもあたることから、今回の翻刻では南原書簡をとりあげました。本翻刻により南原繁や丸山眞男、ひいては近現代思想史研究に少しでも寄与することを願っています。

掲載を許可して下さった著作権継承者の中込悦子氏に深く感謝申し上げます。また、文中掲載の写真を提供いただいた丸山彰氏に厚く御礼を申し上げます。

丸山眞男記念比較思想研究センター長 和田博文

凡例

- 一、書簡の配列は発信年月日順とし、配列順に三桁の書簡番号を付した。
- 二、かなづかいは原文のままとした。促音は小書きで統一した。
- 三、漢字は原則として現行字体を用いたが、人名についてはこの限りではない。
- 四、明らかな誤字・脱字は特に断りなく訂正し、句読点等の体裁を適宜整えた。
- 五、封筒表・封筒裏など、記述の場所を表示する際は「」を用いた。編者による補足は「」で示した。
- 六、末尾に書簡のタイトルを一覧として掲げた。タイトルは、すべて各書簡の末尾に編者が付したものである。
- 七、註の作成にあたり『南原繁著作集』全十卷（岩波書店、一九七二—七三年）、『回想の南原繁』（丸山真男・福田歓一編、岩波書店、一九七五年）、『南原繁書簡集』（岩波書店、一九八七年）、『聞き書 南原繁回顧録』（丸山真男・福田歓一編、東京大学出版会、一九八九年）、『丸山真男集』全十六卷（岩波書店、二〇一四—一五年、第四刷）・別巻（二〇一五年、新訂増補）、『丸山真男書簡集』第一卷（みすず書房、二〇〇三年）、『定本 丸山真男回顧談』上下（松沢弘陽・植手通有・平石直昭編、岩波現代文庫、二〇一六年）等を参照した。とくに南原の評伝的事実については『南原著作集』第一卷・第一〇巻掲載の「年譜」、丸山の評伝的事実については『丸山集』別巻掲載の

「年譜」に依拠した。

- 八、註に記載した「」は、丸山文庫所蔵資料の登録番号または資料番号を示す。①7桁の数字は「図書」、②Mで始まる6桁の数字は「雑誌」、その他の番号は「草稿類」として登録されていることを示す。
- 九、本文の一部は『南原繁書簡集』（前掲）に収録されているが、本刻では丸山文庫所蔵の原資料に依拠した。なお、『書簡集』掲載の書簡を翻刻するにあたり、岩波書店の了承を得た。
- 十、翻刻にあたり、主として川口雄一が編者注を作成し、資料の整理と本文の校訂は金子元氏・山辺春彦氏と共同で行った。

〇二 一九三八年一月一〇日

拜啓 御病気の由、決して御無理なく御養生下され度。手当万端御遺漏なきこと、は存じ候へ共、十分の御注意願度、自分で手紙を書くことなども病中差控へられては如何。

研究室の方は支障なき様、係の人々に話置候間、御安心下され度、切に御大切に願上居候。勿々

十三年一月十日

〔葉書表〕 杉並区西高井戸二ノ三十七 丸山真男様

淀橋区下落合二ノ七〇二 南原繁

〔見舞状〕

〇「御病気」 丸山は年頭より肺炎を発症、半年間の休養を余儀なくされた。

○丸山は、彼自身の回想にしたがえば、一九三六年にはじめて南原と出会った。この年、丸山は、①南原の一九三六年度「政治学史」講義を聴講。当該講義の受講ノートは丸山文庫に所蔵（丸山眞男『南原教授 政治学史Ⅰ 古代及中世』受講ノート」[34]、「丸山眞男『南原教授 政治学史Ⅱ 近世Ⅰ』受講ノート」[35]、「丸山眞男『南原教授 政治学史Ⅲ 近世篇Ⅱ』受講ノート」[36]）。②同じく演習に参加（ヘーゲル「歴史における理性」（歴史哲学）緒論）。当該演習で使用されたと思われる図書は丸山文庫に所蔵（*Die Vernunft in der Geschichte: Einleitung in die Philosophie der Weltgeschichte, auf Grund des aufbehaltenen handschriftlichen Materials, neu herausgegeben von Georg Lasson, 3. abernals durchgesehene und verm. Aufl. Leipzig: Felix Meiner, 1930. [0182423]*）。③南原が出題・詮衡した緑会懸賞論文（設題「政治に於ける国家の問題」）に応募。「政治学に於ける国家の概念」がそれであり、第二席A（第一席該当なし）に入選した。当該論文を南原はつぎのように講評した。「丸山論文は」一切の思惟を、随つて政治的イデオロギーを一に歴史的社會性に依りて拘束せらるゝとなし、国家の概念を歴史的発展の性格に於て捉へんとする。かやうな見地に立つて上に述べたる近代の自由主義の国家概念からファッシズム的国家概念への発展を説明し、後者が一種の折衷的国家観であることを指摘して、筆者は新に弁証法的全体主義の国家概念を目睹するもの、如くである。かゝる考へ方に根拠して一箇の体系として政治学が如何に立てられるか、又筆者が要請するが如き新たな国家概念が歴史的社會的地盤との關係に於て如何に在るのかに就いて重要な問題が存するであらう。然し、それとして一つの纏まつた論作であり、基礎的文獻をよく咀嚼し、刻念なる研究と相俟つて、就中ファッシズム国家のイデオロギーの分析に於て徹つたものがあり、叙述又内容に富み、蓋し今回提出せられた論文中優れた一篇たるを失はぬ」（「懸賞論文選後小記」『緑会雑誌』第八号、一九三六年二月 [M100004] 九四頁）。④一九三六年一月、丸山は東京帝國大学法学部助手の採用が内定、南原より日本政治思想史の研究をすすめられた。

〇〇二 一九三八年一月二一日

拜啓 大ぶんお悪かったやうに拝察せられ、深く御同情申上ぐると共に、最早危険を通過せられた御様子にて喜びに堪へません。肺炎は熱が無くとも警戒せねばならぬ由、この上とも御注意大切に存じ上げます。大学の方は毫も御心配なく殊に予後を十分御撫養下さい。草々

一月二十一日

〔葉書表〕 杉並区西高井戸二ノ三七 丸山眞男様

淀橋区下落合二ノ七〇二 南原繁

〔見舞状〕

〇〇三 一九三八年二月一四日

拜啓 少しく取込み暫く御無沙汰致し居候。最早平熱に復され候や。

先般辻（清明）君を以て申上候通り、後を十分御自重被下度。追々暖くも相成るべく学年も終りに近づき、とかくする内に一冬も暮れんと致し居、重ねて御自愛の程願上居候。匆々

十三年二月十四日

〔葉書表〕 杉並区西高井戸二ノ三十七 丸山眞男様

南原繁

〔見舞状〕

○「少しく取込み」書簡〇四で明かされるように、いわゆる教授グループ事件への対応を指すものと推定される。当該事件は、一九三八年二月一日、大内兵衛・有沢廣巳・脇村義太郎をはじめとする労農派の学者等が一斉に検挙されたことを指す。この頃のことは『南原回顧録』(二八一—一八六頁)に詳しい。南原は、とくに大内のために尽力した。たとえば翌年、南原は被告人のため証人として出廷した(『労農派公判における向坂逸郎、南原繁証人訊問調査(東京控訴院第三刑事部、昭和十九年)』、『続・現代史資料』第七卷(特高と思想検事、みずす書房、一九八二年)所収)。また、つぎのような大内の回想がある。「早稲田警察署(のちに神楽坂署と合併し現在の牛込警察署)のブタ箱における僕の独房の身にしみる寒い寒い日が何十日かつづいたある日突如として僕に二冊の本が渡された。南原君の教え子である藤田(次郎)署長(今の警視庁刑事部長)が南原君の差入れについて特別の処置をとってくれたのである。その一冊は『斎藤茂吉読本』、他の一冊はルウソウの『孤独者の思想的散歩』。久しく活字にうえていた僕の目には活字の一々が紙からぬけいで、目にとびこむように思えた。久しく友情に渴えていた僕の胸には本自体が血となって心臓にあふれるように思えた。僕が巢鴨にうつってから後も、彼は『小島の春』(小川正子著、長崎書店、一九三八年)を入れてくれた。これをも僕はくり返して読んだ。要するに彼の専門外におけるこの三つの関心、歌と冥想と同情が、平生そんなことに全く無関心な僕の心をあたためたのである」(『南原繁総長の横顔』一九四七年八月『回想の南原繁』三六四頁)。

なお、『小島の春』再版(一九三八年二月)の巻末に付された「批評及び読後感」には南原の文章も掲載されている(著作集 未収録)。南原は同書の魅力をつぎのように記している。「『小島の春』から受けた感銘は嘗て読んだ『リヴィングストーン伝』(政池仁著、基督教出版社、一九三四年)や又近くは『土と兵隊』(火野葦平著、改造社、一九三八年)に似たる或はそれ以上のものがあります。その訳はかの英国の偉人の如き貴い人類愛と道徳的勇気を其処に感ずるからであり、又恰も現在大陸に血塗れになつて戦つてゐる同胞と分野は異れども、同じ祖国の為の雄々しき戦士の犠牲の心を読むからであります」。

〇四 一九三八年三月一七日

拝啓

久しぶり貴殿の御健筆に接し、欣喜雀躍の至りに存じます。殊に御病中の御体験と再び起ち上りたる新しき御感激とは何ものにも代へがたき尊きものと拝見いたしました。

御病臥中度々御見舞も申上ぐべき筈のところ、御承知の通り二月始めの検挙事件以来、大学の危機愈々迫り、小生等微力何の御役にも相立たぬとは存じながら、一には友人同僚の爲め、二には学府学問のため、連日同志と苦慮を共に致し居り、本意ならずも失礼致し居ります。先般は御母堂より御懇なる御手紙頂き未だ御返事も差上げ居らず、何卒よろしく御伝へ願へれば幸に存じます。

春とはいへどなほ寒さゆるびず、十分予後を御注意下さるやう呉々も願ひ上げます。研究室の方は決して〳〵御心配無く、四月になつても暖かくなり切つてから御登学のやう御勧めいたします。小生も今より其の日を喜び相待ち居ります。匆々

三月十七日

南原繁

丸山眞男様

〔封筒表〕 杉並区西高井戸二ノ三七 丸山眞男様
〔封筒裏〕 三月十七日 淀橋区下落合二ノ七〇二 南原繁

〔見舞状／近況〕

○「御体験」この頃、病床の丸山が読んだ作品に波多野精一『宗教哲学』（岩波全書、一九三五年 [1936G]）がある。同書末尾には、「年の始めより肋膜炎を患ひて漸く床を離る、を許されたる日、一九三八・三・五説了」と記されている。なお、南原は同書を踏まえ、共同体の紐帯としての「エロス」を「人間の自己実現・自己完成のために客観的对象に立ち向う精神である。ここでは、自我でない他者は、すべて主体である自我の単なる客体として把握されているにすぎない」としている（『南原著集』第一巻七七頁）。

○「友人同僚のため」「学府学問のため」この年、南原はつぎの短歌を発表している（『冬——日記より』『緑会雑誌』第一〇号（東京帝国大学法学部緑会、一九三八年（二月）四七—四八頁（『南原著集』第六卷二四〇、二五〇、二五一頁参照））。「Y君の辞職きまりし朝はあけて葬りのごとく集ひるたりき」「きさらぎとなりし一日O君ら捕はれにけり君既にいへりき」「O君らとはられしみに日月経ぬ君は儂麻質斯を病みて居らずや」。

〇五 一九四二年九月五日

拝啓 お端書拝見。御出発前、殊に取込みて校正の事で御骨折を願ひ御疲れのこと、存じます。再校はあれから此の一日と四日に出て来、大した誤もなく、小生に於て一覽、本日を以て全部終了致した次第です。扨これから如何様に相成るや、当今なれば頗る覚束なき限りです。東京も昨今雨降り漸く夏も去った感です。早く秋も過ぎ冬季に入る事が国の為にも世界の為にも望まれてなりません。

御身御大切に、ゆつくり御休養のほど念じ上げます。早々

九月五日

南原繁

丸山眞男様

〔封筒裏〕長野県高井郡平穂村発晴温泉天狗ノ湯 丸山眞男様

〔封筒裏〕東京、淀橋、下落合二ノ七〇二 南原繁 九月五日

〔礼状〕

○「校正の事」南原『国家と宗教』の校正を指すものと推定される。「南原回顧録」のなかで丸山は、「校正をお手伝いし」たことを明かし、更にもその際の様子をつぎのように語っている。「恐縮したのは、一言一句質問される。つまり、この字句は適当かどうか、ああいう時代ですから極度に神経をつかわれた。それと表現。先生の文章は漢文調で、われわれ新しい世代には少しむずかしい。それで表現をやさしくしていただいた。もう一つは論文名。やっぱり時代でしょうね、とくに「基督教の『神の国』（とプラトンの国家理念）」、それについている副題（神政政治思想批判の為に）をどうするか……」（二五一頁）。

この丸山発言につづいて南原は「裏の物語」をつぎのように明かしている。「『国家と宗教』刊行にあたり」内務省でずいぶん困った。検閲してね、発売禁止にするかどうか、ずいぶん揉めたらしい。私は内務省に昔いたから内輪のことを知ったのですけれども、出版業者同士が承知しない。「私の方がやられたのに、あれはどうか」と密告するんだ。安倍源基さんあたりが局長じゃなかったのかな、一、二度会議を開いたといっていた。ところが、私はジャーナリズムに出ていないでしょう。ずっと学問の場だけでやっている。それに、あなたが易しくしてくれたといっても、やはり難しい。ちゃんとした論理の土俵にのっているのだから、河合（栄治郎）君のケースとはちょっと違う。それで通つたらしい」（二五一—二五二頁）。

同書は、岩波書店より一九四二年一月二七日に刊行。出版会承認ア三二〇二〇四号、初版五〇〇〇部。また、翌年一〇月二五日に第二刷（出版会承認一〇一〇五—一八号、三〇〇〇部印刷）が刊行。同書刊行にあたり南原の詠んだ歌五首が『形相』に収録されている（『南原著集』第六卷四〇—四一頁）。

なお、南原は「本の校正を手伝つて呉れた一友」丸山を誘い、この年二月八日、文楽を観劇した（『南原書簡集』七一、七二頁参照）。この頃、二月一日より新橋演舞場で「大阪文楽座人形浄瑠璃芝居 全員引越興行」が公演されていた。丸山は「南原先生の「趣味」（一九七四年）や『丸山回顧談』上で、助手就任後まもなく



丸山眞男・ゆかり結婚式（1944年3月、丸山彰氏提供）

後列左より、丸山鐵雄（眞男の兄）、丸山矩男（眞男の弟、幹治の三男）、丸山邦男（眞男の弟、幹治の四男）、余護宜郷（小山藍の妹の夫）、齋藤眞一（齋藤三千江の長男）

中列左より、大田千代子（丸山綾子の母）、丸山綾子（丸山鐵雄夫人）、佐藤寿枝（丸山せい
の兄・大庭宥也の長女）、小山清子（小山忠恕夫人）、小山治子（小山藍の次女）、小山光子（小山藍
の五女）、井上久子（小山藍の三女）、齋藤三千江（小山藍の弟の夫人）

前列左より、丸山せい（眞男の母）、丸山幹治（眞男の父）、南原繁、丸山眞男、丸山ゆかり、南
原博子（南原繁夫人）、小山藍（ゆかりの母）、小山忠恕（ゆかりの兄）（以上、丸山彰氏からのご
教示による）

南原から文案に誘われたことを回想しているが、この記憶における曖昧な点が指摘されている（『丸山回顧談』上三九三―三九四頁）。「南原先生の「趣味」には、新橋演舞場で豊竹古鞠^{こまぼし}太夫の芸を観たことが示唆されているが（『丸山集』第十卷一五五頁）、一九四二年二月八日の演目には、古鞠太夫が出演した「傾城阿波の鳴門——十郎兵衛住家の段」が公演されている（『義太夫年表』昭和篇第二卷、義太夫年表昭和篇刊行委員会編、和泉書院、二〇一三年、四三七頁）。（以上、平石直昭氏の示唆による）。

○一九四一年二月八日にはじまった太平洋戦争は、翌四二年、日本軍によるクアランプール占領（二月）、シンガポール占領（二月）、ラングーン占領（三月）等と進行、しかしミッドウエー海戦（六月）、ガダルカナルの戦闘（八月）等により勢力が逆転してゆく。国内では、日本出版文化協会が全出版物の発行承認制を開始（四月）、第二回衆議院議員総選挙（いわゆる翼賛選挙）実施（同月）、日本文学報国会結成（五月）、大日本言論報国会結成（二月）というように事態が進行。南原はこの頃、つぎのような歌を詠んでいる。「世界のいづこにも大きな戦のニュースなき日をわれの安らぐ」「一夜明けし朝^{あさ}世界揺るがむニュースいつか聞くべし戦のなかに」（『南原著作集』第六卷四〇二、四〇四頁）。

〇〇六 一九四四年八月八日

若しかと私かに期待してゐたのが遠く朝鮮に征かれたこと、次いで平壤に着かれたことを最近承ったばかりに、本日思ひ掛なく御入院の御報知に驚きました。併し大事でなくて何よりも事。結局最善の途が開かれつつあるのではないかと思はれます。御留守宅御夫人も至極御元気の御様子、先日態々御訪ね頂きました。愈々状勢急迫中々仕事も手に相つかず何か心待つあるものの如くです。ひとへに御撫養のほど遥かに祈り上げます。

〔葉書上欄〕 朝鮮平壤府 平壤第二陸軍病院一内科十三号室 丸山眞男様

東京都淀橋下落合二ノ七〇二 南原繁 八月八日

〔見舞状〕

○葉書裏は横井弘三筆「木曾（寢覚の床）」（絵画）。

○「平壤」この年七月一日、丸山は歩兵第五〇連隊（松本市）に応召。一七日、平壤に到着、歩兵第七連隊補充隊第一中隊に編入。三二日、脚氣と診断され、平壤第二陸軍病院に入院（一〇月一六日退院、召集解除により平壤を出発し帰還）。本簡書に先立つ一九四四年七月に丸山は南原へ葉書を送付（『南原書簡集』六四六―六四七頁、『丸山集』第十六卷三一七頁、『丸山書簡集』第一卷八一―九頁）。そのなかで丸山は自身の入院を報告している。

○「御夫人」この年三月二四日、丸山は小山忠恕の妹・ゆかりと結婚した。媒酌人は南原繁夫妻。南原は丸山の結婚にあたりつぎの二首を詠んだ。「若き友のこのよるこびに入らむ日をわが待ちにつつ恋ふるが如く」「若き友の夫婦^{めづ}をむかへてなまよみの甲斐の葡萄酒くみて酔ひにし」（『南原著作集』第六卷四三三―四三四頁）。○これより先、丸山は、ニコライ・ベルチャーエフ『ドストイェフスキイの世界観』（香島次郎訳、朱雀書林、一九四一年 [0190962]）を読んだ。丸山文庫所蔵の同書末尾（二五七頁）には「一九四三・九・八」の書込みがある。後年丸山は、同書に關してつぎのような回想を残している。「三谷（隆正）先生が亡くなられるすこし前、（南原）先生はお忘れになったかもしれないませんが、ベルジャーエフの『ドストイェフスキイの世界観』という書物を面白いと私が言ったら、南原先生が読まれて、これは非常に面白いから、病床のつれづれに三谷君に貸そうといわれて、その本を三谷先生に貸されたんですね。私のところに戻って来たときに、あきらかに先生が頁の間にはさんだと思われる紙片がそのままになっていたのをおぼえています。戦争末期でした」（『三谷隆正——人・思想・信仰』（南原繁・高木八尺・鈴木俊郎編、岩波書店、一九六六年 [0206184] 一三六頁）。なお三谷は一九四四年二月没。

〇〇七 一九四四年八月一八日

其後御容態如何にや。本日東洋政治思想史の試験有之、御指示の問題を出して置きました。爾来当地は一般に雨なく暑さも厳しき方です。当今世界の情報、吾に非なる如し。憂子相寄りて慨^{〔カ〕}けども詮^{〔カ〕}衡なからん乎。折角御自愛御大切のほど願ひ上げます。匆々

八月十八日

〔葉書上欄〕朝鮮平壤府 平壤 第二陸軍病院一内科十三号室 丸山眞男様

東京都淀橋区下落合二ノ七〇二 南原繁

〔講義運営について報告〕

○葉書裏は「暁雲碧水に映ず（雲場ヶ池）」（写真）。

○「東洋政治思想史の試験」戦況悪化に伴い繰り上げられた一九四四年度講義の試験を指すものと推定（宮村治雄ほか「解題」本『報告』第八号（二〇一三年三月）九五頁参照）。なお設題など試験の詳細は不明。

〇〇八 一九四四年九月一日

御消息正に拝誦。新しい生活にも段々慣れられた御様子、否努めて慣れんとせらるる態度こそ忝く尊いことに存じます。世界歴史に於ける理性の歩みは遅いやうで案外速く且確實なものを感得します。いよ／＼大事な「天下の秋」と相成りました。微力いふに足らずと雖も御互に自重、祖国の為に誠をいたし度いと思ひます。御元氣のほど遙かに祈り居ります。

乞御笑覧

戦の興奮の中に

この夏を

送り来りて

吾れ

おほおほし

あめ^{あめ}の地にひとつの

まこと

成るべくば

この身燃ゆとも

何に

嘆かむ

〔葉書上欄〕朝鮮平壤 第二陸軍病院二内科三十三号室 丸山眞男様

東京都淀橋区下落合二ノ七〇二 南原繁 九月十一日

〔近時情勢への所感〕

○葉書裏は「奇巖重疊（鬼押しし）」（写真）。

○「新しい生活」病室の移動のことを指すか。この召集解除ののち、一九四五年三月、丸山は広島市宇品の船舶司令部へ応召（臨時召集）。当地から南原へ送った葉書一通（一九四五年三月付）が活字化されている（『南原書簡集』六四七頁、『丸山集』第十六卷三一八頁、『丸山書簡集』第一卷九一〇頁）。のちに南原は、丸山が広島に移った後「尾高朝雄教授（…）に主に相談をして、丸山助教は東京帝国大学にとって必要不可欠の教官だからぜひ除隊させてもらいたい」という意味の請願書をその地区の司令官宛に法学部長名で提出した。これは結局採用されなかつた」と回想（『南原回顧録』二六五頁）。この南原発言にたいして丸山は、「その経緯

はよく存じません。私は船舶司令部の参謀部に一等兵としていたのですが、庶務大尉によればまして、大学から君を召集解除にしてくれという願がきたけれど、結局だめになったといわれました」と応じている。

○「世界歴史に於ける理性の歩み」「祖国の為」敗戦直後の帰還学生歓迎の辞「新日本の建設」（一九四五年一月）のなかで、南原はつぎのように述べている。「われわれは今、二十年の歴史の誇りも光栄も棄てて、世界史審判の法廷に立っているのである。勝者は必ずしも米英ではない。それらがたまたま担わされていた理性と真理そのものである。ヘーゲルの語調を借りて云えば、「歴史における理性」は観念的のごとくしてきわめて現実具体的のものであり、その歩みは遅きがごとくにして速かである。われわれはわれわれ自身敗れたことよりも、世界におけるその理性と真理の勝利を祝そうではないか」（『南原著作集』第六卷六〇―六一頁）。また、南原において「祖国の為」の「誠」は、たんなる国策への迎合とは異なる意味をもった。「国家が学徒に対し、学問の研究を閉じ、あるいは停止するということは、たといそれが一時的であるにしても、国家自らの基礎を脆弱にし、その精神的源泉を涸らすに異ならない。いかに危局の中に立とうとも、国家が諸君に負荷せしめるところは、学問の蘊奥を目ざし、真理の研鑽に従事することとなければならぬ。国民の憂えるところは、少しでも学問的真理の研究が萎縮し、国家の理性が曇らされ、世界のどまるところのない発展の中に国運の一日も停止しないことである」（『国家と学問』一九四二年秋『南原著作集』第六卷二四頁）。

○本書簡中の短歌は、『形相』では「秋風」（一九四四年）と「元旦独語」（一九四五年）とに掲載（『南原著作集』第六卷四八三、四九八頁）。なおこの年、南原は以下のような短歌を発表した（『戦ふ学徒に』『大学新聞』第二号（一九四四年七月一日）。このうち一部は「形相」未掲載、掲載されたうち一部は若干の異同がある）。

「あひ寄りてともに学びし若きらのいづこの涯に戦ふらむか

戦に出で立つ日まで心凝りて書きのこしたる君が論文

桜花咲きのさかりを益良夫のいのち死にせば哭かざらめやも

偉大なる夏来にけらし歴史ありて世界の運命極まらむとす

この日にあへりしのみに吾がこころ燃ゆるが如し人に言はぬかも

わがどちのいのち賭けて学びたる真理のちから振はむとぞぞ

○この年、戦況はインパール作戦（三月）、マリアナ沖海戦（六月）等において混迷を極めていた。本書簡の後にはレイテ沖海戦（九月）、東京空襲開始（十一月）といった出来事がつづく。国内では、つとに前年学徒出陣を実施、本書簡の年には内閣が緊急国民勤労動員方策要綱を決定（一月）、朝鮮総督府が国民徴用令を実施（二月）、東條英機内閣総辞職（七月）、小磯昭内閣が「国民総武装」を閣議決定（八月）、大日本戦時宗教報国会結成（九月）として、戦時体制の強化と東條内閣打倒を契機とする戦争終結の兆候とが相克していた。南原が法学部長に就任し、他の六教授とともに重臣等へ終戦工作を行ったのは一九四五年三月のことである。当該工作は、米軍の沖縄上陸前の戦争終結を目指した行動であった（詳しくは『南原回顧録』二六六―二七七頁参照）。

〇〇九 一九四四年一月六日（消印）

賀正 吉日 南原繁

暮には御夫人御来車恐縮に存じます。

御全家の御多幸を祝し上げます。

〔葉書表〕 武蔵野市吉祥寺三一九 丸山眞男様

〔賀状〕

○「南原書簡集」掲載（二七二頁）。なお、『書簡集』には「印刷」と付記されているが、本書簡はすべて直筆で墨書されている。

〇〇一 一九五五年八月九日

拜啓 石田（雄）、野村（浩一）君等から御消息伝承、御順調の段、

何よりものことに存じます。只御父君御不例の由、蔭ながら御心配申

上げます。小生は兎も角元気でいろく見学して帰りました。どうか呉々も御大切に願はしく。新秋の御面会を楽しみに存じます。

〔葉書表〕 長野県上田市北大手町 柳沢病院 丸山真男様

東京新宿下落合二ノ七〇二 南原繁 八月九日

〔見舞状〕

○葉書表に「左へ御回送願います 東京都、武蔵市吉祥寺三二九 丸山眞男様」と記された薄紙が貼付。

○「南原書簡集」掲載（一九六頁）。

○「御父君御不例の由」丸山の父・丸山幹治（侃堂）はこの年八月一六日に死去した（享年七五歳。一八八〇年五月二日長野県生）。最期に、「ネジをいっばいにまいたゼンマイが一度にゆるんでいくようだ」との言葉をのこして亡くなったという（古谷綱正「保守党政治の周辺」みすず書房、一九六二年、三一―九頁）。父逝去後まもなくの回想として「一月一日 丸山眞男先生回想録」（一九五九年作成（原資料は「談話速記録 思想的回想」〔367〕）、「丸山眞男集別集」第二巻、岩波書店、二〇一五年、とくに二七三―二七七頁）参照。

○「柳沢病院」当時の院長は、ゆかり夫人の父小山磐の妹の長男・柳澤文秋（したがってゆかり夫人のいとこにあたる）。この前年、丸山は左肺上葉切除・胸郭成形手術を受け、翌五五年、療養のため柳澤病院へ移った。

○「いろいろ見学」五月から六月まで、南原もその一員であった日本学術視察団のソ連および中国への訪問を指すものと推定。そこで見聞した内容は「ソ連と中国」（中央公論社、一九五五年）に記されている。南原は、時に一行と別行動をとりながら、モスクワ、レニングラード、スターリングラード、イワノヴォ州の日本人収容所、北京、上海、杭州、南京、武漢、広州という経路をたどった。

〇二一九五六年七月一日

拝啓 御手紙拝見。過日来いろいろ御配慮御苦勞に存じます。先づは祝着御同慶の至り、この結果は今考へられてゐる以上に日本の将来を決定する重要な意義をもたらすものと思はれます。いづれ御拝眉の上にて。匆々

七月十一日

〔葉書表〕 都下 武蔵野市吉祥寺町三一九 丸山眞男様
新宿下落合二ノ七〇二 南原繁

〔第四回参議院議員選挙結果への感想〕

○「南原書簡集」掲載（二〇四頁）。当該書簡にたいして「書簡集」には以下の編注が付されている。「七月八日の参議院議員選挙において自民党の憲法改正発議を断念させるため、野党が三分の一以上の議席を確保することを目標に著者や大内兵衛ら十人から三党に候補者調整の申入れをするという計画があったが、結局中止になり七月六日付丸山眞男氏より書簡で経緯を報告した」（七一―五頁（注69））。

○「祝着御同慶」右の選挙（第四回参議院議員選挙）の結果への感想と推定。当該選挙は、自民党（保守合同）と社会党（統一）との成立後はじめての国政選挙であり、憲法改定や再軍備／中立主義政策が争点となった。当該選挙の結果、改憲勢力は抑えられ、社会党の「勝利」等が報じられた（「朝日新聞」一九五六年七月一日（夕刊）等参照）。

〇二一九五七年一月一日

頌春 一月元旦

お子様方の御成長さぞくお楽しみでいらっしやいませう。本年もどうぞよろしく。

新宿区下落合二ノ七〇二

南原 繁

〔賀状〕

○消印なし。

○「お子様方」丸山は二度、自身の子を連れ南原宅を訪問。一度目は一九五五年一月二五日、二度目は一九五七年一月一日。後者の面会時、南原と丸山は、太平洋戦争にたいするインテリの態度について会話を交わした（以上、丸山彰氏からのご教示による）。丸山が訪ねたある日の南原の様子について以下のようなエピソードがある。「今日は丸山君が来るから、紺で統一」と、はりきるもののメガネは紺色ではありません。紺の大島紬を着て「今や遅し」と貧乏ゆすりをして、丸山眞男先生を待っています。予定時間の三〇分も前なのに。せっかちなおじいちゃん（田上望『西坂のてっぺんの家』キリスト新聞社、二〇一四年 [210841] 二六頁）。

〇三 一九五七年一月一日

謹賀新年 昭和三十二年元旦

南原 繁

東京都新宿区下落合二ノ七〇二

御近著を有難く拝読致し居ります。

御礼を述べようと思ひ暮の研究会に久しぶり出席致したるも御光来無く。

寒中格別御大切に願ひ上げます。

〔葉書表〕 武蔵野市吉祥寺三一九 丸山眞男様

〔礼状〕

○住所まで印刷。

○『南原書簡集』掲載（二一〇頁）。

○「御近著」丸山著『現代政治の思想と行動』上巻（未來社、一九五六年二月一日発行）を指すものと推定。

〇四 一九五八年六月三〇日

拝啓 再び夏がめぐり来ましたがお障りもなきことと存じ上げます。

さて、私こと昨年暮帰郷の折、思いがけなく発病の節は、一方ならぬ御心配を辱うし、且つ御見舞を頂き、有りがたく存じ上げます。

一月末帰京以来静養をつづけて参りましたが、経過順調、発病後満六ヶ月めの六月中旬をもって、平常の生活に復帰することが出来ました。当時を顧みれば、まことに夢のごとく、今日に至りましたこと、天佑と皆様の御芳志の賜ものと存じ、重ねて厚く御礼申し上げます。茲に御報告少々書中を以て御挨拶申し上げます。敬具

昭和三十三年六月三十日

東京都新宿区下落合二ノ七〇二

南原繁

丸山眞男様

〔封筒表〕 丸山眞男様

〔封筒裏〕 東京都新宿区下落合二丁目七〇二番地 南原繁

〔病後経過報告〕

○『南原書簡集』二二三—二三四頁掲載の永栄文宛書簡と同文(印刷)。ただし『書簡集』掲載書簡の最後の一文は、丸山宛書簡にないため、手書きで加筆されたものと推定される。

○「発病」 南原は一九五七年二月、講演旅行として香川県に帰郷、三本松高校(旧制大川中学校——南原の出身校)にて「わが歩んだ道」と題して講演したあと、相生小学校(同じく出身校)の講演中に心筋梗塞を発症。小康をえる翌一月まで同県に滞在した。

○石井和夫の回想によれば、この南原発病と快復ののち、丸山等は南原の了承を得てヒアリングを進めた(『南原回顧録』「あとがき」)。「ちょうどその(余命とされた)四年を越える時にあたっていた古稀記念祝賀会を前に、それまで度重なる丸山真男・福田敏一両教授の徳漣にもかかわらず、「自らを語る趣味は持たない」と頑なに卻けてこられた聞き書を許されたのである。「私の方で問題になるのは大学行政——これが一番むつかしい。大学自治と、それをめぐる教授会、先輩・同僚の内輪話や講座のこと。学問については研究論文、著書といったところかな……まだあったら拾ってください」と自らテーマをあげられた(五一—九九頁)。そして「一九六四年十一月、まだまだ伺いたいことが多く残され、話題によっては全く口を緘されたままのものがあつたにもかかわらず、学士会のマネージャー(理事長)になって忙しくなったから」と打ち切りが宣せられた(五二〇頁)。このヒアリングの記録は、南原の没後、『聞き書 南原繁回顧録』として刊行。丸山はこのヒアリングが「とくに戦中・戦後の時期において南原先生が大学の内外で関与された重大な問題や事件が必ずしも網羅的に取扱われているわけではない」点を断っているが(同書「まえがき」三四頁)、丸山の構想は丸山文庫所蔵資料「南原メモ」南原繁へのヒアリングのプラン(作成年不明 [853-4-5-1])に示されている。丸山が同席したヒアリングとその内容は以下のメモに窺うことができる。

・「南原先生についての回想(丸山)」メモ 作成年不明 [853-4-1]

- ・「南原先生回顧記録 1960.12. 於山ノ上ホテル」南原繁ヒアリング時のメモ 一九六〇年十一月 [853-4-5-2]
- ・「郡長時代 Feb. 28. '66」南原繁ヒアリング時のメモ 一九六六年二月二十八日 [853-4-5-3]
- ・「学生時代 May 27. 1966」南原繁ヒアリング時のメモ 一九六六年五月二十七日 [853-4-5-4]
- ・「Nov. 21. '66 南原繁」南原繁ヒアリング時のメモ 一九六六年十一月二日 [183-2]
- ・「丸山による南原ヒアリング時のメモ」一九六七年二月二十八日 [853-1-4]
- ・「南原回顧メモ」南原繁ヒアリング時のメモ 作成年不明 [853-4-5-5]
- ・「南原先生回想録」南原繁ヒアリング時のメモ 作成年不明 [853-4-5-6]

〇一五 一九六一年十一月一日

第一信有難く頂戴しました。御出発の朝まで論文のことで御苦労相かけ何とも恐縮に存じます。既に落着かれた由、何よりもことに存じます。十一月には晁にも御会ひ下さるとのこと、彼も無喜ぶことでしょう。御健康に御無理なき程度に於て、そちらの生活を有効に過され度。奥様にもよろしく。当方家内よりもよろしく。

十一月一日

S. Nambara 2-702 Shimo-ochiai Shinjuku, Tokyo, Japan
 〔葉書右欄〕 Mr. & Mrs. M. Maruyama Suite 517, Ambassador Hotel
 1737 Cambridge St. Cambridge Mass., U.S.A.

〔礼状〕

○葉書裏は「天龍寺庭園」(写真)。

○「御出発の朝まで論文のこと」丸山は一九六一年一月より、ハーバード大学特別客員教授 (Distinguished Visiting Scholar) としつ招聘され渡米 (六二年六月まで)。ヨーロッパ旅行を挟み、六二年一〇月より St. Antony's College の Senior Associate としてオックスフォードに滞在した。六三年四月に帰国。この渡米に先立ち、丸山は、論文「近代日本における思想的形成」を『政治思想における西欧と日本——南原繁古稀記念』下 (福田歓一編、東京大学出版会、一九六一年 [205125]) のために書き、出発前に脱稿した (同論文の後記「丸山集」第九巻一〇八頁) 参照。

○「晃」南原繁次男。一九三三年七月一三日生、二〇一六年二月一五日没 (享年八二歳)。日本銀行理事、日本輸出入銀行副総裁、日本大学野球協会副会長、学生会常務理事等を務めた。東京大学在学時は野球部の選手であり、主将を務めた。在学中最後のリーグ戦では早稲田大学に勝利、母親を喜ばせたことから「むすこも親孝行したものです」と、のちに南原は語った (南原繁・徳川夢声「問答有用」第三百回) 『週刊朝日』第六二巻第二号、一九五七年一月一三日、二八頁)。

〇六 一九六三年 (消印)

拝啓 最早御帰国の日も近づき御心忙しきこと、存じ上げます。旧臘は奥様御越し下され、御旅行の御様子を委細承りました。御用務を終へて芽出度御帰国のほど、御家族は固より門人一統の鶴首するところ、就中最近 EEC を繞つての西欧異変など詳しく承り度、楽しみに致し居ります。世界的酷寒の砌、折角御自愛のほど願はしく。野田良之君には何処かで逢はれしや。御序もあらば何卒宜敷く御伝へ願ひ上げます。御不在中、大学問題も諸君の努力によって一先づ危機を乗越

へたところですよ。 繁

〔葉書右欄〕 Mr. M. Maruyama 9 Canterbury Road Oxford, England

S. Nambara Tokyo University, Tokyo, Japan

〔近況伺ふ〕

○消印の月日部分が薄く十分判読できない。月は「U」のように読むことができ、日は六日と推定される。なお丸山の帰国はこの年の四月。

○「東京大学消費生活協同組合版」葉書を使用 (裏面に「図書館」(絵画))。

○「EEC を繞つての西欧異変」一九六三年一月一四日、ド・ゴール仏大統領が記者会見で英国の EEC 加盟申請 (六一年に申請したが難航) およびナッソー協定 (六二年一二月に取り交わされた英米の二国間協定) を拒否、また同月二二日、仏国と西独が友好協力条約 (エリゼ条約)、「ボン・パリ枢軸」の成立) を締結したこと等を指すものと推定。

○「野田良之君」野田は一九六二年一〇月から翌年九月まで、パリ大学法経学部教授 (Professeur associé à la Faculté de droit et des sciences économiques de Paris, chargé d'un cours de doctorat sur le Droit japonais) に就いている。

○「大学問題」一九六二年に問題化した大学管理法制化¹⁾ とくにそれに関する学生の反対運動を指すものと推定。『東京大学百年史』通史三 (東京大学百年史編集委員会編、東京大学、一九八六年、八五八―八五九頁等) に詳しい。「昭和三十八年一月二十三日の官房長官黒金泰美の菅法国会工程取りやめの談話により、運動は急速に沈静化した。〔この反対運動に関わった〕処分者の処分解除も数年以内に行われた」(同前)。

〇七 一九六四年二月

謹啓 早春の御益々御清祥の段御慶び申上げます
さて此度前川春雄様御夫妻の御媒妁に依り繁次男晃と幸作長女

富貴子と予て婚約中のところ来る三月二十五日（水曜日）結婚式を挙行致すことになりました

就きましては右御披露少々粗餐を差上げたたく御多用中洵に恐縮に存じますが同日午後六時迄に学士会館（神田一ツ橋）へ御光臨の栄を賜りますよう御案内申上げます 敬具

昭和三十九年二月吉日

南原 繁

小池 幸作

丸山真男様

御手数ながら御都合の程来る三月十四日迄に御一報願上げます

〔南原晃結婚式招待状〕

○封筒なし。印刷。

○「前川春雄」一九一一年二月六日生（東京都）、八九年九月二二日没。当時、日本銀行外国局長、理事（のちに第二四代総裁、在任期間：一九七九—八四年）。前川のセントラル・バンカーとしての業績およびこの頃の動向は、緒方四十郎『円と日銀——セントラル・バンカーの回想』（中公新書、一九九六年、とくに一四一—一四六、一四八頁）に詳しい。

〇一八 一九六五年一月三〇日

拝啓

寒さの彻御清適のことと存じ上げます

旧臘三十日 妻博子の永眠に際しましては 早速御弔問かつ御鄭重

なる御芳志を賜はり 御厚情の程有難く 深く感銘に存じます

就いては 賜りました御芳志は 最近伊豆大島の大火に罹災された元町教会員の方々 その他不運な人々に相分ち 御厚情に応へさせて頂きましたから 何卒御諒承願ひ上げます 敬具

終りに 御高堂皆様の御健康と御幸福を念じ 重ねて厚く御礼申上げます

昭和四十年一月三十日

南原 繁

いろ／＼有難う御座いました。

その内ゆつくり御目にかかり度いと存じます。

〔弔問への礼状〕

○封筒なし。署名まで印刷。

○「博子」一八九六年六月八日生（石川県）、一九六四年二月三〇日没（享年六八歳）。旧姓は西川。一九二七年四月二日、南原と結婚（南原には先妻・百合子がいたが、一九二五年に死別）。

○「伊豆大島の大火」一九六五年一月一日、伊豆大島で発生した大規模火災（大島大火）。同日「午後一時—〇分元町中央海岸寄りの料亭から出火」、「烈風にあおられた元町中心街が七時間燃え続けた大火」で、四〇八世帯・一二七二人の罹災者を出した（黒潮に生きる東京・伊豆諸島編さん委員会編『黒潮に生きる東京・伊豆諸島』上巻、東京都島嶼町村会、一九八四年、二二六頁）。

〇一九 一九六五年一月三日

拝啓 お忙しい中をわざわざ 故人のために玉稿を頂き有難きことに



南原繁・丸山眞男（1966年4月、於丸山宅、丸山彰氏提供）

存じます。出来れば年末の一周忌までに上梓致し度、(東京大学)出版会の石井(和夫)君が配意致しくれ居りますが如何相成りますことか。いづれ拝眉の節、万々御礼申上ぐべき、不取敢寸楮御挨拶まで。奥様にも何卒よろしく。

〔葉書表〕 武蔵野市吉祥寺東町二ノ四四ノ五 丸山真男様

新宿、中落合二ノ一七ノ一 南原繁

(新町名、番地) 十一月三日

〔寄稿への礼状〕

○『南原書簡集』掲載(三五六頁)。

○「故人のために玉稿」博士夫人を偲ぶ関係者の弔辞・寄稿および故人の遺文を収録する『瑠璃柳 南原博士遺文・追憶集』(一九六五年[2001])が南原により編集・刊行。丸山は同書に「奥様を偲んで」を寄稿した(『丸山集』第九巻掲載)。

〇二〇 一九六九年一月七日(消印)

賀正 吉日

南原繁

御風邪の由、御大切に願はしく。いよ／＼最後の関頭に立ち随分御奮闘願ひ上げます。

〔葉書表〕 武蔵野市吉祥寺東町二―四四―五 丸山真男様

〔賀状〕

○『南原書簡集』掲載(四七五頁)。当該書簡にたいして『書簡集』では以下の編注が付されている。「いわゆる「東大紛争」の最終局面のこと。一月十日、加藤一郎

総長代行と七学部学生代表団の間で「確認書」がとり交わされ、十八日には警察機動隊により安田講堂の封鎖が解除された」(七二〇―七二二頁(注147))。

〇二二 一九七〇年八月二五日

拜復 御懇書頂戴致しました。先日は暑い中を御夫妻折角の御光来、恐縮に存じます。その後御容態にも良い徴候が見え始めた由、何よりもことに存じます。小生の風邪は文字通りの微(鼻)恙に有之、もはや全快致しました。例の一儀は左様心得居りますから御懸念なき様。

もう暫くの暑さと存じ、何卒御大切の程を、又奥様にもよろしく。早々

〔葉書表〕 180 都下 武蔵野市吉祥寺東町二―四四―五 丸山真男様

161 新宿、中落合二―一七―一 南原繁 八月十五日

〔丸山の辞意への返書〕

○『南原書簡集』掲載(五一―頁)。当該書簡にたいして『書簡集』では以下の編注が付されている。「丸山真男教授が病気のため東京大学を辞職する件」(七二―頁(注163))。

○『丸山回顧談』下にはつぎのような回想がある。「やはり、つらかったのは南原先生です。辻くんはじめ、みんなに「南原先生に「辞職の意思を」言ったか」と聞かれる。つらいから、いちばん後で」と言ったんです。法学部の承認を得られてから行つたのです。先生に了解を求めるといふのが、いちばんつらかった。女房と一緒に自宅に訪ねて、窮状を訴えました。先生は、「一言もいわなかった。話をきいて」「うん、よくわかった。気にしなくていい」とだけ。叱られなかったことで涙を流しました」(二三〇頁)。

収録書簡一覧

- 1 1938年 1月10日 見舞状
- 2 1938年 1月21日 見舞状
- 3 1938年 2月14日 見舞状
- 4 1938年 3月17日 見舞状／近況
- 5 1942年 9月 5日 礼状
- 6 1944年 8月 8日 見舞状
- 7 1944年 8月18日 講義運営について報告
- 8 1944年 9月11日 近時情勢への所感
- 9 1954年 1月 6日 賀状
- 10 1955年 8月 9日 見舞状
- 11 1956年 7月11日 第四回参議院議員選挙結果への感想
- 12 1957年 1月 1日 賀状
- 13 1957年 1月 1日 礼状
- 14 1958年 6月30日 病後経過報告
- 15 1961年11月 1日 礼状
- 16 1963年 近況伺い
- 17 1964年 2月 南原晃結婚式招待状
- 18 1965年 1月30日 弔問への礼状
- 19 1965年11月 3日 寄稿への礼状
- 20 1969年 1月 7日 賀状
- 21 1970年 8月15日 丸山の辞意への返書